

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 9 日現在

機関番号：23702

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20592503

研究課題名 (和文) 慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方についての研究

研究課題名 (英文) A study of 'Difficulties in telling' to others about living with chronic illness and nursing

研究代表者

黒江 ゆり子 (KUROE YURIKO)

岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：40295712

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：慢性の病い、病いとともに生きる、言いづらさ、慢性疾患、クロニクイルネス、生活者、ライフストーリー、インタビュー

1. 研究計画の概要

病気をコントロールしながら生活している人々が、病気であることによって、あるいは病気の管理に必要な養生法を続けようとするときに、①他者(自分以外の個人、集団、組織)のどのような反応(言語表現・行動)に直面しているか、および②他者の反応(言語表現・行動)に対して病気である個人はどのような思いを抱いているか、③自分の病気のことを誰にどのように伝えているか、そのように伝えている理由は何か、④自分の病気を他者に伝えようとしたときに躊躇した経験、⑤自分の病気を他者に伝えるときの難しさが日々の養生法にどのような影響をもたらしているかについてインタビューを実施し、病気のある生活における他者への「言いづらさ」がどのような実状にあるかを明らかにする。その結果をふまえ、人々がどのようなサポートを求めているかを導き、検討する。また、病気のコントロールをしながら生活している人々にケアを提供している看護職者にインタビューを実施し、わが国の文化における他者への「言いづらさ」を看護職者がどのように捉え、どのようなケアを提供しているかを明らかにする。それらの結果をふまえ、人々が生活の中で求めている支援内容と、実際に提供されているケア内容との両者を分析し、これからの看護のあり方を検討する。これらの検討を通して、生活の中で養生法を続けることが求められる慢性の病い(クロニクイルネス、chronic illness)の領域における人間のとらえ方、健康のとらえ方、および環境のとらえ方について看護学的に特性を導き、看護のあり方を追究し、看護理論の基盤を構築する。

なお、本研究においては、病気の生活として糖尿病(1型・2型糖尿病等)、精神疾患(統合失調症・依存症等)、ストーマをもつ人々(オストメイト)および HIV 感染症などの慢性特性の病気をもつ人々の生活に焦点をあてる。ここにおける病気の慢性特性は、J. コービンと A. ストラウスによる「chronicity: 長く続くという慢性状況の特性」の考え方に基づく。また、インタビューの実施に際しては、R. アトキンソンによるライフストーリーインタビューと M. ブーバーによる対話(Zweisprache)の考え方を基盤として実施し、インタビュー内容からアーキタイプ(元型)を見出していく。

2. 研究の進捗状況

R. アトキンソンによるライフストーリーインタビュー法に基づき、慢性の病い(1型・2型糖尿病、パーキンソン病、ミトコンドリア脳症、HIV 感染、精神障害、炎症性腸疾患)とともにある人々にインタビューを行い、インタビューの内容から人生の段階、あるいはインタビュー協力者の関心に基づいてそれぞれのライフストーリーを描き出し、インタビュー協力者による内容の確認を得た。その上で、日々の生活の中でどのような「言いづらさ」があるのかについて検討を行なった。「言いづらさ」として表現された状況とそこに登場する人物は多様であったが、複数のライフストーリーの中で同様の状況と思いが語られていた。人々は他者に配慮するがために病気について話せなくなることがあり、それは家族であっても同じである。また、自分の病気について力を振り絞って他者に伝えようとするが、分かってもらえない事態に直面すると、その後は病気について言いづらく

なったり、言えなくなったりすることがあり、病気について言えない状態で人間関係を継続しているとそのことに後ろめたさや辛さを抱くことが考えられた。さらに、多様な状況の中で、他者にどのように伝えるかは一律的に考えることができないということに気づくと、その瞬間から、人は他者の話を聞き支える側に移行するという新たな状況が生まれることが示され、援助の必要性が示唆された。(平成20年度実績報告書より)

これらの結果をさらに紐解くと、慢性の病いにおける他者への言いつらさは、病気の発症に伴い、言わざるを得ない状況に遭遇することで他者に病気について話をしてみるが、自分が期待するようには分かってもらえず、その時の他者の反応によって「言うことによる‘傷ついた体験’」が導かれる。それは「なぜ言えないのか」に繋がる。また、このような経緯により言えない状況に至った場合や、病気の発症時期から周囲の人々に知られないようにしている場合などは、病気でないように装ったり、社会的交流を縮小したり、他者の期待に添えないことで怒りを買うなど、自己の中での抑圧感や他者からの厳しい対応に直面し、「言えないことによる‘傷ついた体験’」となる。

人々はそのような中でも何とか自分なりの生き方をしようと試み、生きるための工夫として「言う人と言わない人に一線を引く」ことで開かれた対応が可能となる。さらに、このような生活を長期に亘って続ける中で、自分の身体状態の変化や周囲にいる人の変化等により、以前には躊躇していたことが自然に言える瞬間が生まれ、「言いつらさについて生まれる変化」となることが考察された。(平成21年度実績報告書より)

また、平成21年度および22年度はユングの「元型論」について研究会を開催し、「いま、なぜユングかー『元型』論と現代」「元型論」の抄読会を行ない、日々の生活を営む私たち人間の心の在りよう、そしてその共通性がどのように生まれるのかに接近するために元型論の内容に触れながら検討を行なうとともに看護職者への聞き取りを行った。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。上記研究計画の概要に沿って研究が進んでいる。

4. 今後の研究の推進方策

2011年度は看護職者を対象としたインタビュー内容から慢性の病いをもつ人々の「言いつらさ」を一層明らかにするとともに、看護職者の「聞きづらさ」についての分析を深め、慢性の病いの領域における人間のとらえ方、健康のとらえ方、および環境のとらえ方について看護学的に特性を導き、看護のあり方を追究し、看護理論の基盤を構築する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

①黒江ゆり子：クロニクイルネスと病みの軌跡についての論考ー生活者を支える実践の基盤としてー、日本糖尿病教育看護学会誌、査読無、15(1)、60-63、2011.

②黒江ゆり子：現代人とクロニクイルネス、日本慢性看護学会誌、査読無、2(1)、4-7、2008.

③黒江ゆり子他：慢性の病いにおける他者への「言いつらさ」に関する看護学的省察、看護研究、査読無、44(3)、2011(in press).

④黒江ゆり子他：7つのライフストーリーに描かれた慢性の病いにおける他者への「言いつらさ」、看護研究、査読無、44(3)、2011(in press).

〔学会発表〕(計4件)

①寶田徳、黒江ゆり子、市橋恵子、中岡亜希子、森谷利香、鈴木(古城戸)靖子、田中結華、藤澤まこと、藤岡敦子：慢性の病いにおける他者への「言いつらさ」が意味するもの～5つのライフストーリーより～、第30回日本看護科学学会学術集会、2010年12月4日、北海道札幌市。

②黒江ゆり子、市橋恵子、藤澤まこと、普照早苗、寶田徳、田中結華、鈴木(古城戸)靖子、中岡亜希子、河合伸子、森谷利香、『慢性の病いにおける他者への「言いつらさ』』、第4回日本慢性看護学会学術集会、交流集会Ⅲ、2010年6月27日、北海道札幌市

③市橋恵子、黒江ゆり子、古城戸靖子、Difficulties in Telling to Others about Living with Chronic Illness、13th East Asian Forum on Nursing Science (EAFONS) Annual Conference、2010年2月19日、Kowloon, Hong Kong

④田内香織、黒江ゆり子、藤澤まこと、普照早苗、金子徳子、他3名、慢性の病いとともにある生活に求められる看護援助および援助提供システムについての検討、岐阜県立看護大学共同研究報告と討論の会、2009年2月21日、岐阜県羽島市

〔図書〕(計3件)

①黒江ゆり子、「慢性の病いにおける他者への『言いつらさ』と看護のあり方についての研究」平成20年度～23年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」研究成果中間報告書、2010年、134頁

②黒江ゆり子、ヌーベルヒロカワ、慢性期にある人の特徴と理解(鈴木志津枝他編：慢性期看護論、担当：第Ⅱ章)、2010年、469頁(38-54頁)

③黒江ゆり子、医学書院、系統看護学講座成人看護学 内分泌・代謝(担当：第1章および第6章)、2010年、286頁(2-16頁)